

# 贈り物 患者にぬくもり

5階建ての小児病棟の白い外壁いっぱい、ハートの実がなる木やチョウがソフトなタッチで描かれ、優しい雰囲気漂う。ロビー中央には大きな仕掛け時計。国立病院機構「四国こどもとおとなの医療センター」(香川県善通寺市)は、アートをふんだんに取り入れた病院づくりが特徴だ。

無名の作家のほか病院のボランティアや患者の作品もある。病院アートの患者と医療者、そしてボランティアの心をつないでいる。

おとぎ話のこびとが出てきそうな扉のついた、廊下の飾り棚があった。扉を開けると、ボランティア手作りの贈り物が「あなたがいてくれてうれしい」「元気出そうね」などと書かれたカードと一緒に置いてある。飾り棚は院内19か所に設けられ、見舞客も贈り物

を持ち帰ってよい。

小児病棟に約1年前から入院している三豊市の男子(5)は、毎日昼に、この扉を開けるのが楽しみだ。「今日は何かがあるかな?」。看護師に抱き上げられて扉を開け、毛糸で編まれた白い人形を手にとると、大事そうになでた。折り紙の動物やこいのぼりなどは病室に飾っている。大人の患者

も同じように喜んでる。

贈り物の折り紙を折ったり、メッセージカードを添えて袋に詰めたりするボランティアの一人が、善通寺市の佐々木和子さん(66)だ。2015年、知人に誘われて加わった。月1回病院を訪れ、ボランティア室で5、6人の仲間と手作業をする。「患者の心の支えになっていると思うとうれしい。こうした場を与えてくれた病院内に、自分が助けられている」と話す。



看護師に抱かれ、廊下の飾り棚に入っていた毛糸の人形を手にとる男子

病院は13年、前身の香川小児病院などが統合され、建物が新築されるのを機に生まれ変わった。院長に就任した中川義信さんは、小児病院で手がけ始めたアートを新しい病院でいっそう息つかせることにした。病院が、患者の治療の場としてだけでなく、様々な人が関わる地域の拠点であってほしい」と考えた。

アートディレクターの森合音さんに全体のコーディネートを任せた。多くの人それぞれが力を持ち寄り、病院は生き生きと呼吸するようになった。

筑波大学名誉教授の蓮見孝さんによると、病院アートは戦前に英国で生まれ、米国やオーストラリアでも普及した。日本には、1990年代に先進的な病院の姿として紹介され、少しずつ広がった。高度化、専門分化する医療現場は、ともすると冷たい場所になりがちだ。アートは人のぬくもりを補ってくれる。

(このシリーズは全4回)

「受けたい医療 2018年版」が発売中。一般書店と読売新聞販売店で扱っています。